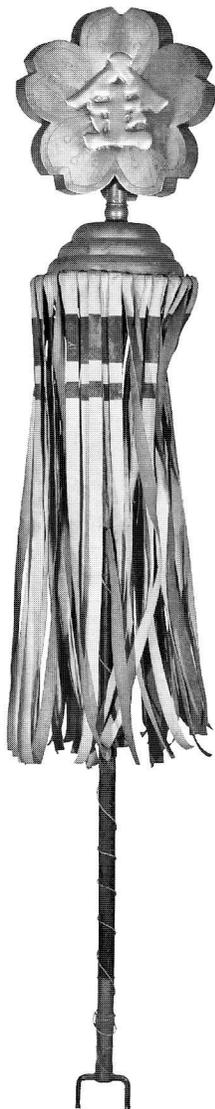


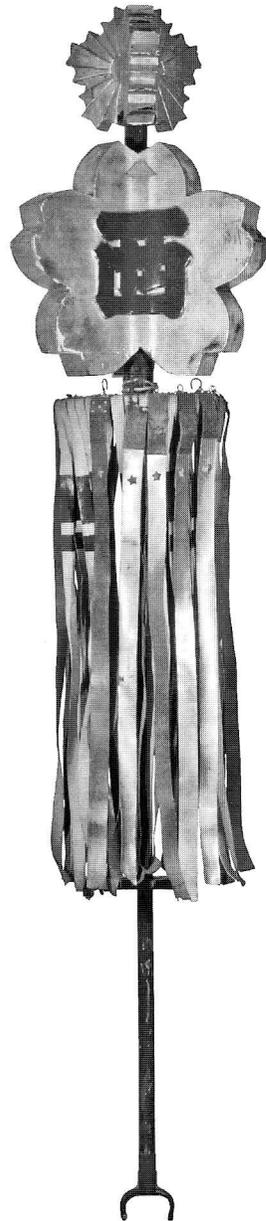
沼津市

明治史料館通信

2009.1.25 (季刊 年4回発行) Vol. 24 No. 4 通巻第96号



金岡村消防組の纏
(当館所蔵)



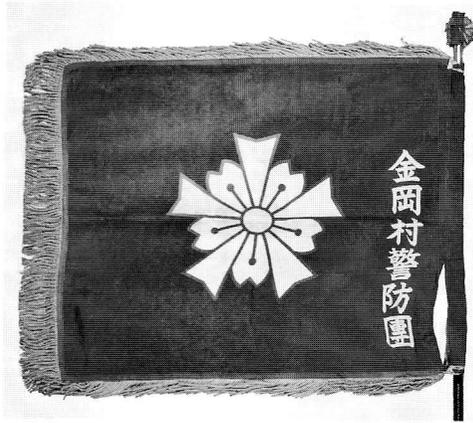
西浦村消防組の纏
(当館所蔵)

ぬまづ近代史点描 ⑥7

消防組と纏

表紙の写真は、当館所蔵の金岡村消防組と西浦村消防組の纏である。纏は、もとは戦国時代の武器のひとつであったが、江戸の大名火消が自家の目印として用いるようになり、後に町火消が用いるようになったもので、明治以降の消防組においても用いられ、消防のシンボルとなっている。

金岡村では明治初年、岡一色、岡宮、東熊堂、西熊堂、東沢田、中沢田、西沢田、沢田新田の八ヶ



金岡村消防組 団旗
(沼津市消防団第24分団所蔵)

村に火消駆付番という火消隊が一組十〜十二人で組織されており、龍吐水、水籠、鳶口、高張提灯等を用いて消防任務を担当していた。

西浦村では、江戸時代には各村の若者組が消防を担当していたが、明治初年に若者による非常組が組織され、火災・水難の警戒、防御にあたっていた。

明治二十七年（一八九四）、消防組規則が發布され、公設消防組が設置されるようになり、同年金岡村で金岡村消防組が設置された。

この時の金岡村消防組は三部制（第一部岡一色・岡宮、第二部東熊堂・西熊堂・東沢田、第三部中沢田・西沢田・沢田）

で組員百五十名で組織された。四十一年、七部制に変更し、組頭以下組員二百五十二名となった。

西浦村では、明治三十九年、日露戦勝記念として久連非常組が公設西浦村消防組第一部となり、その後、四十四年古字に第二部、四

十五年木負に第三部、大正五年江梨に第四部が設置された。大正八年一月、村内全般の消防活動のため、村会で西浦村内の消防組統一が決議され、三月七日付で県令により西浦村消防組（四部制）が設置された。

から脱却して組織的消防となる一助となったともいえる。

金岡村消防組は、昭和二年五月十七日付、紀律厳肅訓練熟達によって一条を、また、十三年十一月に一条を允許されており、纏に二条の金馬簾がついている。

纏についている簾状のものを馬簾というが、元々ついている白い馬簾の他に金色の馬簾がついている。これらは金馬簾と呼ばれるもので、明治四十一年一月の消防組規則施行細則の改正により、功績のあった消防組に対して金馬簾の使用を允許する制度が定められた。

地域の安全を担っていた消防組であったが、昭和十四年、勅令「消防団令」により、昭和初期に軍部の指導で組織された民間の防空団体である防護団と改組・統合されて消防団となり、従来の消防任務に加えて「防空」が課せられるようになり、終戦を迎えた。

現場における功労だけではなく、規律訓練熟達も含まれていたため、いわば金馬簾獲得競争ともいえるような風潮が起こり、幹部が組員に訓練を強要するといったような弊害もあったが、当時の金岡村の「消防組員心得」において「消防組員ハ平素不正粗暴ノ行為ヲナスベカラズ」という条文が第一条にあげられるような消防組員の素質が改善され、軍隊的な訓練を実施できるようになり、従来の「火消」

〔参考資料〕『静岡県消防沿革誌』（昭和四年、静岡県消防組連合会）・「沿革誌」金岡村消防組（金岡村役場文書・当館所蔵）・「沿革誌」西浦村消防組（西浦村役場文書・当館所蔵）

シリーズ
沼津兵学校とその人材

86

徳富蘇峰の沼津兵学校評

徳富蘇峰（一八六三～一九五七）

は、明治・大正・昭和の三代、それも戦後まで生き残り、長く活躍を続けたジャーナリストである。

平民主義から帝国主義への変節、大日本言論報国会長としての戦争協力など、決して進歩的な立場を貫いた人ではないが、旺盛な執筆活動で多くの人々を惹き付けた。

彼は現代を批評するだけでなく、過去を分析する優れた歴史家でもあった。大正期に執筆を開始し、戦後に完成をみた『近世日本国民史』全一〇〇巻は、そのライフワークであった。政治的・思想的に国家主義の立場に立っていたため、皇国史観に則った歴史を叙述した



晩年の徳富蘇峰
(沼津市立第五小学校所蔵)

と思われるが、歴史家としてではなく、公平・中立であり、綿密な史料考証にもとづき客観的な史書を著した。

そのような蘇峰の歴史に対する姿勢を垣間見せてくれるのが、以下に引用する、新聞のコラムで取り上げた米山梅吉著『幕末西洋文化と沼津兵学校』（昭和九年四月五日発行）の紹介文である。

昭和九年（一九三四）四月は、『近世日本国民史』第五二巻「文久元治の時局」を脱稿、第五三巻「元治甲子禁門の役」を起稿していた時期である。

この文章からは、明治政府にあっては敵役であったはずの幕府や

幕臣たちが日本の近代化に果たした役割をきちんと評価していることがわかる。

とりわけ、彼にとっても言論界の先輩にあたる人々に旧幕臣が多かった点、田口卯吉や島田三郎が沼津兵学

校出身者であったという点は、自身も若き日には藩閥政府の言論弾圧に抗する立場をとっていたことも相まって、感慨深いものがあったであろう。

なお、蘇峰は米山の文才を買っているが、五歳年下の米山も蘇峰同様、もとはジャーナリストを夢見た青年であった。ちなみに、米山とは沼津中学校の同窓で親友だった富士郡大宮町（富士宮市）出身の角田浩々歌客（勤一郎）は、蘇峰が経営した国民新聞社に入社したこともある文芸評論家である。米山も蘇峰とは旧知の間柄であり、著書を贈ったのだろう。蘇峰宛の米山の書簡・葉書は、大正期以降のものが一六通残っている（『徳富蘇峰宛書簡目録』一九九五年、徳富蘇峰記念館）。

日曰日より

米山梅吉君の『幕末西洋文化と沼津兵学校』を読む

蘇峰生

今日の所謂の実業家中には、筆を揮うこと、算盤珠を弾くが如き者少くない。即ち小林二三君の如き、

片岡直方君の如き、藤原銀次郎君の如き、福沢桃介君の如き、松永安左衛門君の如き、其他記者が知る可くして未だ知らざる人々も少くあるまい。その中に於て、米山梅吉君の作物を見る毎に、君や誤りて実業家になつたのではないかと思ふ。

これは勿論妄評であらう。けれどもそれほど米山君の著作は、玄人向きに出来てゐる。今回記者の手許に達したる「幕末西洋文化と沼津兵学校」の一小冊子の如き、実に玄人跣足と云うところだ。本書は明治最初期に出て来りたる沼津兵学校の成行を叙したるもの。然も小題大做、此の吵乎たる一つの学校を題目として、如何に幕府が明治の文化に貢献したるかを説き、正に是れ幕府の爲めに、気焔万丈を吐き出したるもの。

記者は沼津兵学校に就ては、聊か知る所があつた。明治中期、記者等が世間に顔を出す際に、その先輩として言論界の指導者であつた田口鼎軒、島田三郎の諸君は、其の学生であり、而して大先輩たる西周、田辺蓮舟、中根香亭の諸先

生、皆な其の教授であつた。而して其の後身たる沼津中学校の経営者にして最初の校長は、実に江原素六君であつた。

沼津兵学校が、凡有る意味に於て文化に貢献したるは云はずもがな。其の大局から見れば、是亦た幕府が文化施設の一部作業に過ぎなかつた。如何に幕府が文化に貢献の大なることよ。

諺に楚材晋用と云ふ。明治政府は薩長人士によりて建立せられたが、其の知識と手腕とは、幕府が養成したる人材によりて、供給せられたことは、若し当時の官員録を披らき来れば、之を知るに余師あらむ。それは民政にも、文教にも、財政にも、軍務にも。其他一切の方面に於て、皆な然りとす。

特に新聞方面に於ては、前記の田口、島田の諸君以外に、其の大先輩と云ふ可き、栗本鋤雲、成島柳北、福地源一郎、沼間守一諸君の如き、何れも幕府の殘党である。乃ち福沢翁の如きも、曾て幕府に榻を積きたる一人であつた。

『東京日日新聞』昭和九年四月二九日夕刊 (樋口雄彦)

お知らせ欄

◎企画展「火消しのお仕事 沼津消防沿革史」開催中

平成20年、自治消防は創設60周年を迎えました。消防は私たちの命・生活・財産を守る大切なものですが、あまりにも身近であるためか、その歴史を紐解く機会はそう多くありません。本展では江戸時代から現在までの沼津地域の消防沿革史をご紹介します。

〈展示内容〉

- 江戸時代の火消し
火消し装束・獅子浜村火事顛末の文書 など
- 明治時代 火消しから消防組へ
消防組刺子・テレクスイ・腕用ポンプ・半鐘 など
- 大正〜昭和戦前期
沼津大火絵葉書・警防団旗・消防ラッパ など
- 戦後〜現在 自治消防の誕生
軽便ポンプ・刺子 など

○火伏せの民俗

秋葉講掛軸・秋葉山御札・消防団規約など
半鐘を叩いたり、刺子を着られるコーナーもあります。

平成20年度 第2回企画展

火消しのお仕事

沼津消防沿革史

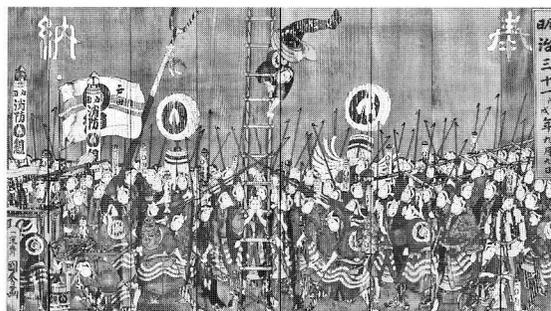
平成21年1月24日(土)~3月22日(日)

◆ギャラリートーク ◆ 学芸員が展示の解説をします
期間中の第2・4土曜日の11:00から企画展会場で開催します
*申込み・参加料は不要(観覧料は必要です)

沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL(055)923-3335 FAX(055)925-3018

開館時間 9:00~16:30
休館日 1月26日、30日
2月2日、9日、12日、16日、23日、27日
3月2日、9日、16日
入館料 大人200円 小100円
(6歳以下) 中学生以下無料
(6歳以下) 中学生以下無料
公共交通 沼津駅より徒歩10分(沼津駅西口から徒歩10分)
沼津市立沼津西熊堂372-1(沼津市西熊堂372-1)2F 2階東洋
口 沼津市立沼津西熊堂372-1(沼津市西熊堂372-1)2F 2階東洋
©100



部田神社奉納絵馬 一運齋国秀画 明治31年 (戸田 部田神社所蔵)

沼津市明治史料館通信 第96号

編集 沼津市明治史料館
発行 沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二一
電話 〇五五・九二・三三三三
FAX 〇五五・九二・三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashisetsu/meiji/index.htm